

「今、私の晴雨計は！」^⑱

「ある女流歌人の死とその家族」

平山征夫

今回は少し長い随筆になるが、ある家族のことを触れてみたい。

“手をのべてあなたとあなたに触れたときに息が足りないこの世の息が”

これは「平成の与謝野晶子」と讃えられ、二〇一〇年八月約十年にわたる乳癌との闘いの末六十歳で亡くなった女流歌人河野裕子の辞世の一首である。一首と云うのは晩年癌の苦しみと闘っていた河野は、はじめ手帳や枕元

にあるティッシュの箱、薬袋などあらゆる紙に歌を書きつけていたが、それも出来なくなった今際には、いきなりぼそぼそと歌を詠みだした。この歌も河野がいきなりつぶやき始めたのを夫で歌人（同時に細胞生物学者）である永田和宏が聴き取った四首の一つである。

私は四年前本屋の店頭で永田と河野の共著である「たとへば君―四十年の相聞歌」という本を見つけて、手に取ってこの歌に出会った。最後の「この世の息が」というところで衝撃が体を走った。歌でそんな思いをしたことはなかった。なのでショックでもあった。河野の名は毎日歌壇の選者などで知っていたが、夫も著名な歌人

とは知らなかった。永田によれば、この四首を詠んだ翌日、河野は発作のあと「われは忘れず」と詠みかけて、先を促されると「うん、これでもういい」と言ったそう、これが歌人河野裕子の歌との永遠の別れであった。ものすごい歌への執念に震えを覚えた。

永田と河野は京大と京都女子大の短歌部に所属していて知り合いその後結婚、男女ひとりずつの子供が生まれたが、その二人も歌人、娘の紅は生化学者というところまで父親と相似だ。息子の淳は出版社を運営しながら短歌の道に励んでいる。河野が乳癌に襲われたのは二〇〇〇年、五十四歳の時だった。直ちに手術、このころから夫婦の相聞歌は増えてい

く。同時に歌人一家は、自身と妻と母の死をそれぞれが見つめながら生きることになる。その一家に二〇〇八年、河野六十二歳の時怖れていた癌再発・転移のショックが襲う。そしてそれぞれの家族への想いが歌になる。

“死なないでとわが膝に来てきみは泣くきみがその頸子供のように” 裕子
“わたしには七十代の日は在らず在らぬ日を生きる君を悲しむ” 裕子
“大泣きをしているところへ帰りきてあなたは黙って背を撫でくるる” 裕子
“ともに過ごす時間はいくばくさはあれどわが晩年に君はあらずも” 和宏

「歌は遺り歌に君は泣くだろう
いつか来る日のいつかを恐る」

和宏

「七秒に一粒落ちる点滴の「ブド
ウ糖500」最後まで落つや」

淳

「母の辺で過ごす七月八月は終
わらないでほしい夏休みなり」

紅

河野が癌を再発した際に彼女の
発案で始めた家族持ち回りで書
いたエッセイ集「家族の歌―河野
裕子の死を見つめて」という本も
読んだ。家族の心のリレーが綴ら
れていた。

昨年夏、河野裕子の評伝「たっ
ぷりと真水を抱きて」を淳が出版
した。本の帯に「母の最後から二
番目の七首を書き取ったのに、そ

れまで父や紅ばかりが口述筆記
をしていたことに少しのやっか
みを抱いて・・・とあったのが目
についた。母親と息子の感情が伝
わってくる好評伝だった。とくに
河野の「死ぬときは息子だけが
居てほしい手も握らぬよ彼なら
泣かぬ」の歌がバイアスになっ
ていた淳も、最後は母の腕に頭を
抱え込まれ「お前はほんとにいい
子。優しくてほんといい子」と最
期の言葉を繰り返して聴くところ
はジーンときた。

河野が亡くなった二か月後の
二〇一〇年十一月号の文芸春秋
に紅は「逝く母と詠んだ歌五十三
首」という随筆を寄せている。夫、
息子、娘が妻・母との関係を終え
る日を見つめながら過ごした記

録は、家族とは何か、死に立ち向
かう人間の心の揺らぎなどいろ
いろ考えさせられた。そして、河
野は家族に見守られ、沢山の相聞
歌を残して逝った。冒頭の辞世の
歌を残して・・・。

こう書くと歌で結ばれた一家
が励まし合いながら、限られた
日々を送ったように思われるし、
河野も見守られながら最後まで
歌に執着しながら人生を全うし
たように見えるが、実際はそうで
はかった。発病後二年くらいして
河野の精神状態が極めて不安定
になったのだ。死に向う不安、思
うように活動できない不満、睡眠
薬の副作用も加わり、いきなり激
昂し、逆上し、永田を怒鳴り攻め
まくるようになったのだ。刃物を

持ちだして、家中の包丁を机や畳
に突き刺すこともあった。淳や紅
に助けを求めても同じだった。家
族の神経はズタズタとなった。今
振り返れば、自分が苦しんでいる
のに、夫たちは変らず自分の世界
で過ごしているという不遇感が
猜疑心となっていたのだとわか
る。それが少しずつ改善してい
ったのは精神科医の治療の効果
だったが、その頃癌が再発した。
シヨックだったが、それからは永
田たちは自分たちの悲しみや不
安をそのままぶつけるようにな
った。河野の死が近づく不安を残
される家族は泣きわめき訴えた
のだ。河野はそれを受け止めるよ
うになってゆく。こうして嵐を潜
り抜けた家族の状況「大泣き

を・・」の歌によく表れている。
河野の死を見つめ続け受け止めてゆく家族の歌も素直に伝わってくる。

「あほやなと笑ひのけぞりまた笑ふあなたの椅子にあなたがいない」
和宏

「亡き妻などどうして言へようてのひらが覚えているよきみのてのひら」
和宏

「死して後お母さんと呼ぶをためらわずなりお袋となり損ねたる母」
淳

「いろいろなときにあなたを思うだろう庭には秋の花が来ている」
紅

河野が逝ってからの家族の話で一番印象的だったのは、半年くらいした頃遺歌集を出すため河

野が手帳等に書き残した歌を淳が中心なって家族で判読・解読しあう場面だった。読みにくい河野の字を判読して歌として完成させてゆく作業をやっている時は、三人には河野も一緒だった。この作業のことを永田は「知らず知らず敬虔な思いにとらわれていくのをどうしようもなかった」「歌を作り続ける作業の純粋性において、河野裕子はやはり生まれながらの歌人だった」と記している。だから永田は「わたくしは死ぬではいけないわたくしが死ぬときあなたはほんたうに死ぬ」と詠んでいる。だから今もこの家族の歌の中には河野は生きているのかもしれない。

河野の最後の残り三首を記す。

「あなたらの気持ちがあんなにわかるのに言い残すことの何ぞ少なき」

「さみしくてあたたかかりきの世にて合ひ得しことを幸せと思ふ」

「八月に私は死ぬのか朝夕のわかもわかぬ蟬の声降る」

歌があんなに力を持っていることを感じさせられたのは啄木以来だった。そしてひと時「家族の絆」のことを思っていた。

(平成二十八年九月十二日)